

ダイニングのテレビはいつもつけっぱなしだった。

会社から帰ってきてからすることはもう習慣づいてい
る。まずテレビをつけて、米を洗って炊飯器をセットし
て、洗濯物を取り込んで、キッチンの部分だけ電気をつ
けて夕飯を準備する。帰宅はいつも六時。チャンネルは
決まってはいいない。どこを見ようが、内容はどこも似て
いるニュースしかないのだから。

今日もいつもとかわらず、テレビをつけたまま夕飯を
作っていた。

今回のニュースの特集は老人の孤独死。一人暮らし、
七十八歳の男性が自宅で亡くなっていたという話だった。
発見したのはホームヘルパー。死後、すでに三日経って
いたそうだ。彼は二年ほど前に妻に先立たれ、すでに子
どもたちは独り立ちしていたため、一戸建てに一人で住
んでいたらしい。

最近はどういったケースが多いと、そうニュースキャ
スターが沈痛な面持ちで孤独死を語っていた。地域間の
つながりの希薄化は、孤独死が増加する原因の一つであ
るとコメンテーターが加える。そのあともつらつらと。

食器を洗う、冷たい水が手の感覚を奪っていく。しか
し、じんじんと痛みを伝える手先よりも、耳のほうが痛

かった。

「転勤になった」

数日前、帰宅したお父さんがダイニングにあるテーブ
ルに座りながら言った。

久しぶりの早い帰宅だった。平日に夫婦で食事をとっ
たのは、いつが最後だっただろう。少し明るくなった食
卓にうれしく思って、夕飯を食べていた時だった。

私は言葉が出なかつた。いや、言葉どころか、脳が次
にする動作の命令さえ出してくれず、頭の中が真っ白に
なつた。

「それは、決定事項、なのよね？」

絞り出した声を懸命に張って、ゆっくりと、平然を装
つた。しかし、動揺は隠せないまままだ漏れして、箸が
震えている。

「ああ。今日内示が出たんだ」

お父さんの目は私をまっすぐに見え据えている。冗談
で言っているわけではないのは、その目からストレート
に伝わってくる。けれど、そのあとに続いているはずの
一言を待ってしまふ。望みは叶わないのもわかっている。
それでも、期待は消えない。たった一言でいいのに。

「嘘だよ」

そう言ってくれるだけで、楽しい食卓に戻れるのに。

先月の後半あたりに、お父さんが言った。

「春から九州へ転勤するかもしれん」

その言葉を、どこか実現するわけがない話だと受け止めていた。だからその時は、そっか、とだけ返していたのが悪かったのだから。二度目だというのに、まだ私はお父さんの一言を待ち続けている。

お父さんの転勤はこれが初めてではない。以前は一年間、東北工場へ赴任があったのだが、それは二〇年ほど前の話だ。私も働き盛りだったし、一年という期間が決まっていた夫の転勤について行く気はなかった。それに、そのときは息子の竜哉が私とここで残ることになっていたのだ。確かに、働きながらの子育てに対して、一人で長期挑むのに抵抗がなかったわけではない。けれど、同じ町内に母が住んでいたこともあったし、それより、幼い子どもを私が守らなくては、という気持ちのほうが大きかった。

けれど、今は私とお父さんしかいない。竜哉はここからずっと離れた場所の大学へ行ってしまった。お盆と年末年始しか帰っては来ない。もう寂しさを紛らわすものはこの手がない。

「一カ月に一度帰ってこられるように、旅費は出してももらえるらしい。だから、なんとかなるさ」

お父さんは苦笑いではあるけれど、なんとか笑っていた。

けれど、私はお父さんのようにも笑えない。

私はここで独りになるの……？

「私もついて行くわ！」

頭で考えるよりも先に、言葉が口をついて出た。

「もう五〇よ。そろそろ退職してもいいころでしょう？それに、前々から言ってたじゃない。専業主婦になりたいつて。竜哉一人の学費くらいなら、私が働かなくてもなんとかなるわ。ちょっと贅沢をひかえれば大丈夫よ。だから」

まだ続けようとする私の言葉をさえぎるように、お父さんはいつもより少し大きな声でゆっくりと言った。

「そうなるよ、帰れなくなるぞ」

「え？」

「今回の転勤は期間がわからん。定年まで、下手したら定年後も九州にいる可能性が高くなるって言ってるんだ。この家に戻ってはこれなくなる」

私は言葉に詰まった。

この家は私とお父さんが働いて建てた家だった。決して大きくはない、けれど小さな庭と、家庭菜園ができるスペースもある。二人で長年頑張ったかいあって、すでにローンも払い終え、本当にこの家が私たちのものになってからは一〇年ほどしか経っていない。

それにこの家は竜哉が生まれたころに建てられて、壁の傷一つさえも竜哉の成長の記録と思い出がつまってい

るのだ。日々の生活でこすれた床も、痛んだ畳も、全て、
そうやすやすと捨てられるものではない。

「竜哉のことを思うなら、お母さんにはここにいてほし
い」

そう言われては、もうついて行くとは言えなかった。

ニユースはもうお天気ニユースに変わっていた。どう
やらまた明日も雪が降るらしい。明日も、明後日も、し
明後日も、ずっと雪マークが続いている。毎年この時期
は、早く暖かくなればいいのに、そう思うのに、今年は
思わない。まだ冬が終わらないことを確認しては、毎日
小さく安堵する。

手をタオルで拭いて、一息ついた。もう洗うべき食器
は無くなり、調理に使った鍋も洗い終わってしまった。

あとはこれらを拭いて、食器棚にしまっただけ。それで
今日の家事は終わりだ。

食器棚にはいろいろな食器が並んでいる。来客用のグ
ラス、飾りのついた大皿、ポウル、キャラものコップ、
いつもの食卓に並ぶ皿。竜哉がいたころにはこれの半分
くらいは使っていたのに、今は一段分も使わない。

コップを置く段に並ぶマグカップも私とお父さんが使
うものが前に来て、竜哉のマグカップは奥に追いやられ
ている。次は私のだけが前に来るのだろう。

今じゃ不要なものばかりだわ。

ため息をひとつついてから、大皿を食器の水切りから
持ち上げた。

「あ……」

忘れていたその重さに、持っていた力では足りず、大
皿が手から滑り落ちていく。

ゆっくりと、でも真っ直ぐに床に向かつて。まるでス
ローモーションを見ているようだ。私はそれを止めるど
ころかまばたきさえできない。大皿は一度床に衝突し、
割れていく。破片は少し跳ね上がり、円形に散らばった。

足元には大きなかけら3つと細かな破片。これは

ガチャ

「ただいま」

お父さんの声にハッと我に帰ると、時計は9時を回っ
ていた。どうやらソファでうたたねをしまっていた
らしい。

「めずらしいな。お母さんがこんなところで寝てるのは」

「そうね。ちょっと疲れてたのかしら」

少し笑って、キッチンへ向かった。食器は水きりに置
かれたままだ。割れたはずだった皿は、いつもとかわら
ず、食器棚の同じ場所ですべて並んでいた。

考えすぎたと自分に嘲笑を送る。ただ、全て夢ならい
いのに、そう思う気持ちは消えない。

「ビールと日本酒どっちがいいの？」

スーツの上着をハンガーに掛けるお父さんに尋ねると、迷った顔をして少し唸った。どんなに遅く帰ってきても一杯のアルコールを摂取するのはお父さんの日課だ。

「そうだな。今日は日本酒で行くか」
「日本酒ね。わかったわ」

食器棚からお父さんのグラスを取り出して、いつもどおり、お気に入りの日本酒を注いだ。

次の日は土曜だった。けれど、まだ仕事が付いてないと、お父さんは会社へ出かけて行った。もう転勤まであと二カ月ほどだ。引き継ぎやらいろいろあるのだろう。それにしても、休日というものはこんなにも静かなものだっただろうか。雪が音を吸い取っているから、なおさらそう思うのかもしれない。

掃除やら洗濯やらをすませ、新聞を片手に一人ソファに沈んでいると、ふいに気になった。

窓から見える鉛色の空は、昼にも関わらず光を通そうとしない。あたりはうす暗い。今日はめずらしく風がないらしく、モノクロの世界に雪が静かに降り続けている。

広い家に一人ぼっち。

これからは、毎日こんな感じに時を過ごすのか。ただ漠然とある休日の時間。私が見つければテレビさえも音を発しない。家事を一通りしてしまえば、もう終わりだ。

使う場所も多くないから、部屋は汚れないだろう。洗濯物も一人分では干すのにもそんなに時間はかからない。それに、今までお父さんにやってもらった地域の奉仕活動も私が参加しなければならぬ。今まであまり参加しなかったこともあって、私には世間話をするような人が近所にいない。そんなところに行くのはとても億劫だ。昨日見たニュースの特集を思い出す。

「孤独死」

暇な時間があるといらないことを考え始める。その考えはノンストップで頭を駆け巡る。次第に加速して、下降していく。

ああ。どうして、私はお母さんなのだろう。お母さんの仕事ももうすぐになくなるのに。もう家族は家に一人もいなくなってしまうのに。私はお母さんと呼ばれて初めてお母さんになれるのに……

「だめだわ」

潤んできた目から落ちそうになった涙を指の腹ですくい上げた。

このままでは、堕ちてしまう。

私は危機感を感じて、家の外へ行くことに決めた。

車庫は左側が不自然に空けられ、ワインレッドの軽自動車に右によせて駐車されている。そのぼかんと空けられた広さに苦笑してしまった。

車庫のシャッターを開けると、やはり外は白く、音が

なかった。車に乗り込み、キーを回しエンジンをかけて、やつと音が生まれる。安心してアクセルを踏み、車庫を出た。グググとタイヤが音をたてて、雪をねじった。

町には車が走っていた。こんなに雪が降っているのに、みんなどこへ行くこうというのか。

隣をよぎる車のいくつかは車体の上に雪を積んだまま走っていた。色とりどりの車たちも、だいたい雪を車体に張り付かせているため、色がくすんで見える。

こちらも次々と雪がフロントガラスに張りついてくるが、ワイパーに退かされて外へ散っていく。

一〇分ほど走ると、すぐに目的地へ着いた。

広い庭の一部だけ雪がすかしてあり、そこへ車を止める。すると、縁側から、厚着をはずんぐりとした母さんが顔をのぞかせた。

私の実家は農家だった。トラクターをしまふ納屋と車庫、それと大きな家。夏には庭一面に咲く大きなヒマワリが私は好きだった。父さんが、私が喜ぶのを知って毎年植えていてくれたのだが、三年前にその習慣もなくなってしまった。

二〇年ほど前に私は結婚して家を出た。

それよりも前に、兄さんは農家を継ぐ気はないと父さんと大喧嘩して家を出て行った。歳を経るについで、兄さんも丸くなって、この町に家族を連れて戻ってきたのはここ一〇年ほどの話だ。それでも実家で同居はせず、

町内に家を建て、そこで暮らしている。

父さんが亡くなってから、母さんはこの家にずっと独りで住んでいる。

母さんは突然の訪問にも関わらず、家にあげてくれた。先に居間に行つてなさい、という母さんの言葉にあまえ、居間へ足をすすめた。居間の障子戸をあけると、あたたかい空気が私を包んだ。ヒーターがぼつぼつと鳴り、部屋をあたためており、蛍光灯の光がほのぼのと黄色い。居間はこたつがあり、バラエティ番組の笑い声がテレビから流れている。

着込んだコートを脱いで、おとなしく私の定位置となつている場所に足を入れ母さんを待っていると、緑茶を淹れてきてくれた。私はそれを受け取り、両手で包んだ。

冷たくなつていた手が感覚を取り戻していくのがわかる。

母さんがこたつに入ったところで、私は話を切り出した。

「ねえ、母さん。お父さん、転勤になっちゃった」

「ええ?! 本当かい? そりゃ……」

「もう内示は出されたわ」

母さんは口をぼかりと開けて停止してしまった。一度コップをこたつの上に静かに置いてから、口を結び直して言った。

「そしたらお前……一人になっちゃうじゃないか」

「うん」

すぐに肯定した私に疑問を持たらしい。母さんは眉をひそめて、私の瞳をのぞきこむ。

「和真さんについていくんじゃないのかい？」

「そしたら、母さんが独りになるわよ」

「そんなの、秀樹が居るから大丈夫だよ」

「兄さんはたまにしか顔見せないんでしょう？ 居ないも同じよ」

「そうかねえ」

お茶が冷めるのを待って、一口飲んだ。舌には少し熱めではあったけれど、喉から食道へ、体に熱を与えていった。

それから、今までの話をぼつぼつと話し始めた。

お父さんの赴任先、一月に一度帰ってこられること、私がお家にいなければならぬことも、全て。

母さんは時々うなずき、静かに聞いてくれていた。

全部話し終わってから、母さんが寂しくなるねえと呟いた。

お茶はもう残り少ない。コップももう冷えてしまっている。視線は下斜め四五度。見慣れたこたつの木目を追っている。

「ねえ、母さん。頑張って育てた私も兄さんも出てっちゃって寂しくない？」

「そりゃ寂しくないわけないさ。それよりいきなりどうしたんだい？」

「私は早々に結婚しちゃったし、兄さんは家をドタバタにして出てっちゃったし、母さん、幸せな時間が短かったんじゃないかって……」

「何言ってるんだい！」

母さんがゴンと音をたてて湯呑の底をコタツに叩きつけた。呆気にとられて今度は私がぼかりと口を開けて静止してしまった。

「たしかに父さんはもういないし、お前たちも家を出て行ったけれど、それでも幸せじゃないと思ったことは一度だってないよ。母さんは、奈津子と秀樹が生まれた時も、育てていた時も。秀樹が出て行った時も、あの子ならやりたいこと見つけてちゃんとやっていけるって信じてた。奈津子が幸せに暮らしているのを見るのもうれしかった。父さんが亡くなってからも、ずっとそう思ってたよ。」

普段温厚で滅多に怒ることのない母さんが、ものすごい剣幕でまくしたてるのに呆気にとられた。

「それを、お前がそんなこと言うんじゃないよ」

母さんの瞳がキラキラと輝いているのは、きつと見間違っても何でもない。私は母さんから視線を外し、湯呑を覗いた。そして、母さんから見えないように、小さく笑みをこぼした。湯呑の中の水面が揺らいだ。

それから数日後、いつもどおり、テレビをつけっ放しにして夕食を作っていた。すると、電話が鳴った。煮込んでいたカレーの火を止めて、小走りで電話へ向かった。「もしもし、お母さん?」

聞き覚えのあるお父さんより少し高い声が聞こえた。声の主を間違えることはない。

「ああ。竜哉元気にしてる?」

「うん。お母さんは?」

「大丈夫、元気よ。それより、どうしたの?」

たまによこす竜哉の電話は、いつも何々を送ってほしいだとか、そういった頼みの電話が多い。今回もそうなのだろう。へへへ、と笑った。

「お米なくなっちゃったから、おばあちゃんちのお米送ってほしいんだ」

やっぱり。心の中でそう思いながら、わかったよ、と返した。

「それよりね、お父さん、九州に転勤になっちゃったんだ」

「ええ?!マジで?!」

「春からね」

そこまで言つと、私と同じく、竜哉も黙ってしまった。

近くでテレビの音だけが流れている。

竜哉がしばらくたつてから、かすれた声で、それじゃあ、と続ける。

「お母さん一人だよ」

「そうね。だけど、月に一度は帰ってこられるように旅費を出してもらえるんだって。だから、ずっと会えないわけじゃないし、大丈夫よ」

今度は平気で明るく言えた。私の声の調子をとらえても、それでもまだ不安が残っているらしく、竜哉の声が落ち着いた、低い声になった。

「寂しくなるなあ」

「うん……けどね、お母さんは大丈夫よ。心の中でずつとあんたらのこと思ってるからね」

また竜哉が黙ってしまった。普段は言わないくさいセリフを言ったのに照れしまったのだろうか。自分の吐いた言葉に少し後悔する。竜哉の声を待っていると、少しかすれた声で俺さ、と言つのが聞こえた。

「春休み、帰るよ」

これは嬉しい一言だ。

「春が待ち遠しいわね」

ふふふ、と笑った。玄関のほうからガチャガチャという音が聞こえた。

「ああ。お父さん帰ってきたみたい。ちょっと待ってて。今かわるからね」

受話器を置いて、私は小走りで玄関へかける。お父さんに鍵を開けられる前に鍵を開けよう。そして、おかえりと晴れた笑顔で言つのだ。